

# 日本の水郷・水都



日本人が造った  
水とふれあう情緒的空間

リバーフロント整備センター発行

本書は、宝くじの普及宣伝事業として助成を受け作成されたものです。

# 松川

まつかわ



富山のまちは、かつて度重なる洪水に苦しめられ、その解決法として、富山城の北側を湾曲して流れる神通川にバイパスを造り、その跡地を現在の松川だけ残し埋め立て、川の上にまちを築いた。それが、富山が、「水の都」といわれる所以である。これはその昔、神通川は現在の富山市内中心部を流れていったが、たびたび洪水が起つたため、まっすぐ富山湾に注ぐよう河川のバイパスがつくられたものである。そしてかつての河道は廃川地となり、一部残された右岸側約二十㍍が現在の松川となつてゐるのである。

「松川」という名前は、当時の中州や川辺りにたくさんあった松にちなんで、縁起が良いとしてつけられたものであるといつ。



富山市役所



## 松川—まつかわ—

松川は、今の富山市の中心を流れる大河・神通川のかつての川筋を今に伝える、いわば「なごりの川」である。

戦国時代は、富山城主・佐々成政が、当時ここを流れていた神通川を天然のお堀として富山城の守りに充てていた。その後、前田家が治めるようになり、文政（一八一八一一八三〇）から安政年間（一八五四一八六〇）にかけては、北前船が富山城あたりまで上ってきていたといふ。神通川を往来する船上から見えたので、富山城は「浮き城」と呼ばれていた。

富山城は、一五三三年（天文元年）に豪族水越勝重が建てた城で、度重なる焼失や明治維新での取り壊し

松川は、今の富山市の中心を流れる大河・神通川のかつての川筋を今に伝える、いわば「なごりの川」である。

戦国時代は、富山城主・佐々成政が、当時ここを流れていた神通川を天然のお堀として富山城の守りに充てていた。その後、前田家が治めるようになり、文政（一八一八一一八三〇）から安政年間（一八五四一八六〇）にかけては、北前船が富山城あたりまで上ってきていたといふ。神通川を往来する船上から見えたので、富山城は「浮き城」と呼ばれていた。

## 神通川のなごり川「松川」

などではほとんどの建物を失った後、一九五六年（昭和三十一年）に城址公園として整備されている。

現在は、緑豊かな公園には天守閣が再建され、夜はライトアップされた姿が美しい。富山城址公園と松川は一帯的に整備され、松川べりは桜の名所でもあり、春には多くの花見客で賑わう川とまちの歴史を思い起こさせる空間となっている。

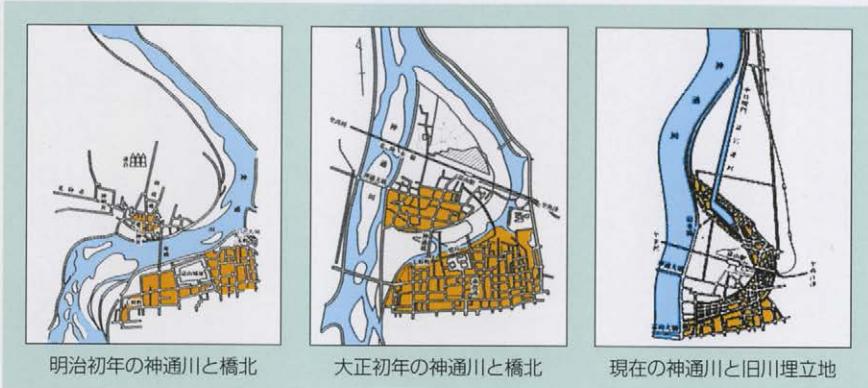


春の富山城

ライトアップに映える城郭



神通川の変遷



遷り行く神通川・へ馳越線工事

明治期までの神通川は、富山市中心部で大きく蛇行して流れしており、洪水時にはこの箇所でよくあふれていた。このため、オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケの提案を受け、明治二十四年（一九〇一年）～三十六年（一九〇三年）この蛇行している区間の西側にまつすぐな水路を建設し、川の流れを直線化する「駆越線工事」が行われた。いまの富山大橋から富山赤十字病院あたりの区間である。この工事は、川の中央に幅二m、深さ一・五mの細い水路を掘り、自然の力を利用し洪水のたびに少しづつ水路の幅を広げていくものだった。現在のように、完全に流れを移し替えたのは大正十年（一九二一年）頃である。

神通川の駆越線工事の結果、元の神通川はわずかに松川を残すのみで、広大な廢川地が富山駅と市街地の間に横た

わり、都市の発展に大きな障害となつた。このため、東岩瀬港から富山駅北まで約五kmの運河を造り、運河を掘つたときの土砂で神通川の廃川地を埋め立て、新市街地を作る計画が作成された。この運河は、富山市と当時の東岩瀬町の両市町をつなぐことにより「富岩運河」と名付けられ、富山県ではじめての都市計画事業として、昭和五年（一九三〇年）から建設を行い、昭和十年（一九三五年）に完成している。かつての神通川の跡地は、現在、富山県庁、富山市役所、NHKなどが建ち並ぶ富山市の都心となつており、現在の松川・いたち川が、旧の川筋の一部として残っている。また、富岩運河の建設により東岩瀬港と富山駅北が水路でつながり、舟による資材の運搬が非常に便利となり、運河沿岸は一大工業地帯を形成することになった。

## 松川　—まつかわ—



桜、水面輝く春の松川



常夜燈

## 松川の保存と活用へ

昭和五十年代、松川では、違法駐車、汚濁、夜間の治安等、現代の都市が抱える諸問題が発生し、松川を全て埋め立て、駐車場を整備する計画が浮上した。

しかし、その後、松川の保存・活用が議論されるようになる。このような背景のもと、市中心部に富山らしさを復活させたいとの声があがり、「北前舟が行き交つたかつての神通川のにぎわいをもう一度」と、昭和六十三年から遊覧船運行が始まった。往復約一・四km、松川の七橋を約三十五分でめぐるコースは、年間約一万人が利用するという。堀割構造であることや沿川の桜並木により、乗客からは、街路沿いの車や騒音が気にならず、静かでゆったりとした時間を過ごすことができる。今では、五十人乗船可能な大型船も航行されている。

また、舟運の再現により、観光資源と

もなった松川の両岸には、桜並木が立ち並び、夜にボンボリが灯る遊歩道には、地元富山県の彫刻家の作品二十八点が設置され、「松川べり彫刻公園」として整備されている。その他、親水テラスなどの水辺の休憩施設は、市民や観光客の憩いの場ともなっている。



松川遠景

現在、改修と浄化が進んだ松川には、悠々と錦鯉が泳ぐ姿も見られ、川面に映る春の桜、夏の新緑、秋の紅葉、そして冬の雪景色を堪能できる、色合い豊かな水辺となっている。



松川べり彫刻公園

## リバーフェスタ

松川沿いの空間を活用して毎年行われるリバーフェスタでは、松川辺りを「リバーライブ劇場」として、琴、マンドリン、アコーディオン、吹奏楽などの様々な楽器やコラスによるライブのほか、松川の散策ツアーや、松川に関する絵画の屋外展示、さらには市の下水道局による、社会見学等、毎年、松川を活用した、さまざまなイベントが企画され、多くの市民で賑わいを見せる。



琴の演奏を楽しむ観客



春の松川をゆく

## 富山桜まつり

松川辺りは、二・五kmにわたって五百本の桜が咲き乱れるさくらの名所であり、日本さくら名所百選にも選ばれ、桜の見頃の時期には、「富山桜まつり」や「全国チンドンコンクール」が開催され、十万人以上が訪れる。また、開花にあわせ、夕方からはライトアップもされ、水面に映し出される幻想的な風景は、桜の名所の魅力を一層、際立たせている。

リバーフェスタ



チンドンコンクール



## 地元企業も参加する地域の取組み

松川一帯では県、市、民間事業者が協力し、松川の清掃活動を実施するなど、地域協働の取り組みが始まっている。特に、地元企業は社会奉仕活動の一環として協力している。

松川を美しくする会活動風景①

また、近年、市民団体の「松川を美しくする会」が設立されており、松川の水位一定化、水質改善、松川を核とした地域活性化などの一体的な水辺づくりの活動を目指している。これは、松川の水位を一定に制御することで富山の治水技術の高さをアピールしたい。水質を改善し、森の小川のような清らかな水が流れていで欲しい。丸石の護岸をもつと風情が感じられる景観に変えたい。さらには、水辺のショッピングセンターの

建設や県内有数の祭りのショーや開催するイベント、等々を総じて行うもので、実現化へ向けて市民みずから、松川を核とするまちの地域活性へのアイデアが次々と生まれ始めている。



松川を美しくする会活動風景②